様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　２ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２３０６

研究課題名（和文）ポストヒューマニズムの時代における芸術学の再構築に向けた総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study for the Reconstruction of Aesthetics in the Age of Posthumanism

研究代表者
門林　岳史（Kadobayashi, Takeshi）

関西大学・文学部・准教授

研究者番号：６０３９６８３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、N・キャスリン・ヘイルズ（1999年）、ロージ・ブライドッティ（2013年）などが近年展開してきたポストヒューマン理論を参照し、その批判的検討を通じてポストヒューマニズムの時代における美学・芸術学の理論的構築を企てることである。そのために本研究は、一方で美学・感性論をめぐる哲学的議論、そして、他方で具体的な芸術作品や文化表象という二つの側面からポストヒューマニズムの諸問題を渉猟し、ポストヒューマン理論の芸術学にとっての意義、そしてさらには人文学にとっての意義を明らかにすることを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
表象文化論学会第12回大会（2017年）での研究発表パネル「エンボディード・ポストヒューマニズム」、科研費研究会「批判的ポストヒューマニティーズの射程」（2019年、関西大学)、国際学会「Posthumanities in Asia: Theories and Practices」(2019年、関西大学）の開催などを通じて、本研究の学術的意義を広く社会に問うことができた。とりわけ「Posthumanities in Asia」はロージ・ブライドッティ氏を基調講演者として迎え、ポストヒューマニズムを現代の人文学が抱える制度的・理論的な問題に接続し、アジアから問い直すことの意義を活発に議論した。

研究成果の概要（英文）：This research project, built upon and critically examining the posthuman theories such as N. Kathrine Hayles (1999) and Rosi Braidotti (2013), aimed at proposing a theoretical framework of aesthetics pertaining to the age of posthumanism. Surveying the issues of posthumanism in the theoretical discussions of philosophy and aesthetics, on one hand, and in the cultural representations in art works, on the other, this research sought to illuminate the significance of posthuman theory in aesthetics and art theory, and humanities in general.

研究分野：メディア論

キーワード：ポストヒューマン　ポストヒューマニズム　ヒューマニズム　人文学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

Ｎ・キャスリン・ヘイルズ『我々は如何にしてポストヒューマンになったか』（1999 年）などを嚆矢とし、2000 年代以降、主に英米圏の批評理論において、ポストヒューマンないしポストヒューマニズムの概念をめぐる議論が活発に展開されてきた。ポストヒューマンとは、テクノロジーの発達とともに、人間が人間を超えた存在になる可能性、あるいは、従来理解されてきた人間性がその根幹から揺るがされる危険性について考察するために提起された概念である。本概念が含意するところは、情報技術の発展が約束する未来を楽観視する議論（レイ・カーツワイル、2005 年など）から、行きすぎた遺伝子工学や先端医療に警告を発する悲観論（フランシス・フクヤマ、2002 年など）まで多岐にわたる。また、本概念は、それに先行してダナ・ハラウェイ「サイボーグ宣言」（1983 年）以来、活発に議論されてきたサイボーグ文化論とも近接する概念であり、文学や映画、ポピュラー・カルチャーなどの領域におけるポストヒューマン的表象ないしサイボーグ的表象の分析もこれまで盛んに行われてきた。

このようにこれまでに広範な領域で展開されているポストヒューマン研究であるが、ヘイルズの研究が明確にしているように、本概念は、西洋近代的な規範のなかで構築されてきた人間性の概念を批判的に吟味する射程を有している。すなわち、私たちがどのような条件のもとで人間以後の存在（ポストヒューマン）になっているかを検討することは、同時に、私たちがそもそも人間をどのような存在として理解してきたのかを再検討することなのである。さらにロージ・ブライドッティ『ポストヒューマン』（2013 年）などの研究は、ポストヒューマニズムを、人文学（ヒューマニティーズ）の批判的な再構築に向けた広範囲な射程を持つ概念として再定義している。この点においてポストヒューマニズムは、思弁的実在論、ニュー・マテリアリズム、情動論的転回など、ポスト構造主義を批判的に乗り越えながら、脱人間中心主義的に人文研究を再定義しようとする近年の一連の批評理論の動向と軌を一にするものである。

本研究の研究代表者、研究分担者、研究協力者は、2014 年頃より定期的に研究会を開催し、以上のようなポストヒューマニズム関連の欧文文献を継続的に講読してきた。本研究課題は、こうした研究交流を礎とし、それを具体的な研究成果につなげていくために申請された。

２．研究の目的

「１．研究開始当初の背景」で述べたポストヒューマン理論を参照し、その批判的検討を通じてポストヒューマニズムの時代における美学・芸術学の理論的構築を企てることが本研究の目的である。そのために本研究は、一方で美学・感性論をめぐる哲学的議論、そして、他方で具体的な芸術作品や文化表象という二つの側面からポストヒューマニズムの諸問題を渉猟し、総合的な観点からポストヒューマン理論の芸術学にとっての意義を明らかにする。

一方で、ポストヒューマニズムに内在する脱人間中心主義的着想は、感性的認識の主体としてこれまで自明なものとされてきた人間の地位を再検討することを要請している。他方で、近年のメディア・アートや SF 映画などの作品には、単にポストヒューマン的な表象を与えるのみならず、表現の媒体や方法の水準で科学技術と芸術的表現が分かちがたく融合しているものが現れはじめている。これら両者の状況を相補的なものと捉え、総合的な見地からポストヒューマニズムの時代の芸術学のあり方を展望するのが、本研究の課題である。

３．研究の方法

具体的な研究は、以下に述べる二つの軸に沿って進められた。

（１）ポストヒューマニズムの美学・感性論（担当：門林、岡本、唄）

ポストヒューマニズムの理論的核心には、人間中心主義的な主体概念への批判がある。したがって、ポストヒューマニズムの見地から美学・感性論を再検討するならば、感性的認識の主体もまた、脱人間中心主義的に再定義することを必要としている。こうした脱人間中心主義的な美学の近年の展開として、神経系美学（デイヴィッド・フリードバーグなど）や進化論美学（ヴィンフリート・メニングハウスなど）など、認知科学の進展を受けて、人間に限らない生物一般の感性的認識を考察する研究動向が登場してきている。感性的認識の主体をこのように生物一般へと拡張し、感性を生物の生存戦略と社会形成の問題系に位置づける動向を踏まえて、感官を人為的に増強し変形するポストヒューマンの感性的認識をどのように理論化することができるだろうか。本研究は、その一つの課題として、脱人間中心主義的な美学の系譜を検討することを通じて、ポストヒューマニズムの美学の理論的構築を企てる。同時に、主体概念の再検討を通じて、ポスト構造主義以降、広範囲に展開されてきたヒューマニズム批判の文脈にポストヒューマニズムの言説を接続し、テクノロジーに接続された人間存在を出発点とした新たな人文学のあり方について問題提起する。

（２）ポストヒューマニズムの芸術表現（担当：松谷、増田、篠木、大貫、福田）

芸術作品や文化表象におけるポストヒューマン的な主題や表象の分析は、文学作品や SF 映画などを中心にこれまでに広範囲に研究されてきた。しかしながら、近年の映画制作において科学考証の専門家を招聘することが常態となっていることに伺えるように、再現＝表象の水準と科学実践の水準とを明確に分離することは、今日、困難になりつつある。また、2000 年代以降、メディア・アートの領域において人工生命や人工知能の技術を用いた作品が多く現れているが、それらの作品においても問題となっているのは、それらの作品がどのようなテクノロジーの表象

を与えているかではなく、それらの作品がテクノロジーを用いてどのようなことを実効化し、その結果、生命や知性といった概念にどのような変更を要請しているかであることが多い。芸術表現や文化表象をめぐるこのような状況を検討することは、前項で挙げた課題であるポストヒューマニズムにおける主体概念の再検討を具体的な作品の分析を通じて補強することにつながるだろう。本研究ではこのような企図のもと、ヒューマン・エンハンスメント、身体改造、ゾンビ表象などのポストヒューマン的表象を、メディア・アートや映画作品、さらには幅広いポピュラー・カルチャーのうちに渉猟し、具体的な表現の分析からポストヒューマニズムの芸術学を提起する。

４．研究成果

本研究課題は、月例で研究会を開催し、重要な文献の購読や研究メンバーそれぞれの研究課題についての議論を進めるかたちで行われた。その成果は、研究メンバーそれぞれの研究発表や論文などのほか、本科研費による学会の研究発表パネル、公開の研究会や学術会議の開催などによっても発信された。

まず、2017 年度には表象文化論学会第 12 回大会(2017 年 7 月 1、2 日、於アーツ前橋)において、本研究課題メンバーで研究発表パネル「エンボディード・ポストヒューマニズム」を企画・応募し、科研費受託前から進めてきた共同研究の成果を予備的に発信した。本研究発表パネルでは、研究協力者（当時）の大貫菜穂子（「身体の拡張と身体改造――ポストヒューマン化はどこまで可能か」）と福田安佐子（「ポストヒューマン的身体としてのゾンビ」）がそれぞれ研究発表を行った。情報社会における脱身体化した主体性の条件として思い描かれることの多いポストヒューマン的主体をめぐる議論において、身体性の諸相がどのような意義を持つかを検討することを目的として企画され、コメンテーターとして迎えた小泉義之氏による批判的コメントをはじめとし、身体化されたポストヒューマン的主体について活発に議論が交わされた。

2018 年度には公開の科研費研究会「批判的ポストヒューマニティーズの射程」(2019 年 3 月 17 日、関西大学)を開催した。本研究会では本研究課題の研究分担者である岡本源太（「ヒューマニズムとは何であったのか―ルネサンスと現代」)、唄邦弘(「ポストヒューマニズム時代におけるヒューマニズムについて」）および研究協力者（当時）の篠木涼（「ポストヒューマニティーズ状況における政府の芸術助成金の哲学に向けて」）がそれぞれ研究発表を行い、当該研究分野の専門知識を有する宮﨑裕助氏（新潟大学）をコメンテーターに迎えて活発な意見交換が交わされた。また、本研究課題の副次的な成果として、本研究課題にとってもっとも重要な先行研究のひとつであるロージ・ブライドッティ（ユトレヒト大学、オランダ）の著作『ポストヒューマン――新たな人文学に向けて』（フィルムアート社、2019 年）の翻訳書を刊行した。

2019 年度には、ロージ・ブライドッティ氏を基調講演者として迎え、国際学会「Posthumanities in Asia: Theories and Practices」(2019 年 6 月 8、9 日、関西大学）を開催した。本会議では上記のブライドッティ氏の基調講演に加えて、毛利嘉孝氏（東京藝術大学)、アネケ・スメリク氏（ナイメーヘン・ラドバウド大学、オランダ）による講演が開催された。また、学会開催にあたって研究発表を広く国際的に募集し、30 本の応募のうち、25 本の発表を 7 つのセッションに分けて実施した。全般的に、ポストヒューマニズムの問題を、現代において人文学が抱える制度的・理論的な問題（ポストヒューマニティーズ）に接続し、それをアジアから問い直すことの意義が活発に討議され、大変に実りのある国際学会になった。本学会には 11 ヶ国からの参加者があり、本科研費の研究分担者からは大貫菜穂（「Posuhuman Subjects in Body Modification」)、唄邦弘（「Base Materialism of Georges Bataille and Contemporary Materialism」）が研究発表をした。本会議の実施にあたっては本科研費に加えて、関西大学国際部より国際シンポジウム助成金を受託した。

以上に加えて研究代表者、研究分担者は、本科研費受託中に、国際学会での発表、研究論文の執筆、関連研究図書の分担執筆などのかたちで本研究課題の研究成果を発表し、全体として十分な研究成果を遂げた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計15件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 門林岳史	４．巻 2019年5月臨時増刊号
２．論文標題 新しい唯物論	５．発行年 2019年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 28-32頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 門林岳史	４．巻 2020年1月号
２．論文標題 コミュニケーション資本主義に出口はあるか？――伊藤守編『コミュニケーション資本主義と〈コモン〉の探求――ポスト・ヒューマン時代のメディア論』書評	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ＵＰ	６．最初と最後の頁 34-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 門林岳史	４．巻 第11巻
２．論文標題 マンガ『ゆるキャン△』における写真的〈拡張〉現実	５．発行年 2020年
３．雑誌名 情報科学芸術大学院大学紀要	６．最初と最後の頁 104-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Akihisa IWAKI, Nobuhiro MASUDA, Yosaku MATSUTANI	４．巻 第31巻第1号
２．論文標題 Creative Evolution of Moving Images?: Deleuze’s Cinema and Pre-cinema	５．発行年 2019年
３．雑誌名 文学・芸術・文化 ： 近畿大学文芸学部論集	６．最初と最後の頁 47-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松谷容作	4．巻 第3巻第1号
2．論文標題 ポストメディア状況以後の日本のアートの営み――ポストインターネットとグローバルアートの視座で	5．発行年 2019年
3．雑誌名 外語論叢（暨南大学外国語学院編）	6．最初と最後の頁 153-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松谷容作	4．巻 第120巻第12号
2．論文標題 宇宙から地球をながめる	5．発行年 2019年
3．雑誌名 國學院雑誌	6．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 増田展大	4．巻 第3巻第2号
2．論文標題 アニメーションの皺――身体造形の形態学的分析を通じて	5．発行年 2019年
3．雑誌名 外語論叢（暨南大学外国語学院編）	6．最初と最後の頁 161-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 増田展大	4．巻 第3号
2．論文標題 メディアの動物性、インターネット以降のロマン	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Poi	6．最初と最後の頁 22-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 ロージ・ブライドッティ（著）、門林岳史、増田展大（訳）	4．巻 47-1
2．論文標題 批判的ポストヒューマニティーズのための理論的枠組み	5．発行年 2019年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 183-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡本源太	4．巻 46-6
2．論文標題 美学の今世紀	5．発行年 2018年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 134-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡本源太	4．巻 46-14
2．論文標題 マルクス・ガブリエルと芸術の問題――絶対者のもとに休らう芸術作品	5．発行年 2018年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 278-282
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 増田展大	4．巻 3
2．論文標題 オブジェクトと写真――ポスト・インターネット再考	5．発行年 2018年
3．雑誌名 アーギュメンツ	6．最初と最後の頁 76-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松谷容作	4．巻 35
2．論文標題 嗅覚を軸としたインターフェイスとコミュニケーションについての調査研究	5．発行年 2018年
3．雑誌名 同志社女子大学総合文化研究所紀要	6．最初と最後の頁 3-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 増田展大	4．巻 7
2．論文標題 歪んだ顔写真、または顔認証技術をめぐる試論	5．発行年 2017年
3．雑誌名 ヱクリヲ	6．最初と最後の頁 226-237
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松谷容作	4．巻 34
2．論文標題 環境内存在としてのコンピュータ――コンピュータを介した経験の更新についての一考察	5．発行年 2017年
3．雑誌名 総合文化研究所紀要（同志社女子大学総合文化研究所）	6．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計20件（うち招待講演　1件／うち国際学会　14件）

1．発表者名 Takeshi Kadobayashi
2．発表標題 Digital Indexicality
3．学会等名 International Conference: Post-Media Ecologies in Asia, Beijing Normal University（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Naho Onuki
２．発表標題 Posuhuman Subjects in Body Modification
３．学会等名 Posthumanities in Asia: Theories and Practices, Kansai University, Japan（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kunihiro Bai
２．発表標題 Base Materialism of Georges Bataille and Contemporary Materialism
３．学会等名 Posthumanities in Asia: Theories and Practices, Kansai University, Japan（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kunihiro Bai
２．発表標題 The Relationship Between Photographer And Model In Japanese Photography: Reconsideration About “Shishashin” (“I” Photography) Of Nobuyoshi Araki
３．学会等名 21st International Congress of Aesthetics, Belgrade, Serbia（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Asako Fukuda
２．発表標題 The New Figure of Zombies: Collectiveness, Media and Infection
３．学会等名 21st International Congress of Aesthetics, Belgrade, Serbia（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yosaku Matsutani
２．発表標題 A Perspective about Human Experience and Sensibility in the Coming Space Life: Based on an Analyze of Research Results on the Body and Mind of the Astronauts
３．学会等名 21st International Congress of Aesthetics, Belgrade, Serbia（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Genta Okamoto
２．発表標題 The Technological Imagination of Nakai Masakazu and Walter Benjamin: A Comparative Approach to Aesthetic Experience of Modernity
３．学会等名 IRCA International Seminar, International Research Center for Aesthetics and Art Theory (IRCA)-Universit_ degli Studi di Roma “Tor Vergata”, Rome, Italy（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 増田展大
２．発表標題 イリュージョンとモデリング――科学における生命付与（アニメーション）について
３．学会等名 日本記号学会第39回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 門林岳史
２．発表標題 東日本大震災後の表現とメディア
３．学会等名 沖縄県立芸術大学（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nobuhiro Masuda
２．発表標題 The Material Mediation of Bioart
３．学会等名 Quite Frankly: It's a Monster Conference, SymbioticA+Somatechnics, University of Western Australia, Australia（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yosaku Matsutani
２．発表標題 A Perspective about Human Existence in the Coming Space Life: Based on an Analyze of Survey on the Body and Mind of the Astronauts
３．学会等名 2018 ELLAK International Conference “Encounters with the Posthuman: Materiality, Vitality, Narrativity,” Sookmyung Women’s University, Korea（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 岡本源太
２．発表標題 ジョン・トーランドの汎神論と人文主義的理性――ジョルダーノ・ブルーノ哲学の継承として
３．学会等名 関西哲学会第71回大会、龍谷大学
４．発表年 2018年

１．発表者名 岡本源太
２．発表標題 ジョルダーノ・ブルーノを読むマラン・メルセンヌ――収縮と無限
３．学会等名 第51回ルネサンス研究会、同志社大学
４．発表年 2018年

１．発表者名 岡本源太
２．発表標題 ヒューマニズムとは何であったのか――ルネサンスと現代
３．学会等名 研究会「批判的ポストヒューマニズムの射程」、関西大学
４．発表年 2019年

１．発表者名 唄邦弘
２．発表標題 ポストヒューマンにおけるバタイユの反ヒューマニズムについて
３．学会等名 研究会「批判的ポストヒューマニズムの射程」、関西大学
４．発表年 2019年

１．発表者名 Takeshi Kadobayashi
２．発表標題 Galapagos Media: Japanese Media in the Age of Global Capitalism
３．学会等名 East Asian Media Studies Conference (Harvard University)（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Takeshi Kadobayashi
２．発表標題 Rosalind Krauss’s ‘Post-Medium Condition’ Revisited: From the Standpoint of Film and Media Studies
３．学会等名 Towards Post-Media Theories in Asia (Tokyo University of the Arts)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Genta Okamoto
２．発表標題 Nakai Masakazu and Aesthetics of the Machine: A Paradigm of Modernity in Japan 1930-1950
３．学会等名 Paradigms of Change in Modernising Asia and America (Ghent University)（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 増田展大
２．発表標題 バイオアートとシミュレーション――美学と自然科学の交差にむけて
３．学会等名 東アジア漢文圏における日本語教育・日本学研究の新たな開拓（Jinan University）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 松谷容作
２．発表標題 宇宙とメディア――感性をめぐる考察
３．学会等名 東アジア漢文圏における日本語教育・日本学研究の新たな開拓（Jinan University）（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計11件

１．著者名 三村 尚彦、門林 岳史（共編著）	４．発行年 2019年
２．出版社 フィルムアート社	５．総ページ数 318
３．書名 22世紀の荒川修作＋マドリン・ギンズ――天命反転する経験と身体	

1．著者名 坂本 泰宏、田中 純、竹峰 義和（編）、門林岳史他（分担執筆）	4．発行年 2019年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 550（分担執筆251-278頁）
3．書名 イメージ学の現在――ヴァールブルクから神経系イメージ学へ	

1．著者名 マキシム・クロンブ（著）、武田 宙也、福田 安佐子（共訳）	4．発行年 2019年
2．出版社 人文書院	5．総ページ数 200
3．書名 ゾンビの小哲学	

1．著者名 床呂郁哉（編）、大貫菜穂（分担執筆）	4．発行年 2019年
2．出版社 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	5．総ページ数 113（分担執筆13-26頁）
3．書名 トランスカルチャー下における顔・身体学の構築　第三回	

1．著者名 ロージ・ブライドッティ（著）、門林岳史（監訳）、大貫菜穂、篠木涼、唄邦弘、福田安佐子、増田展大、松谷容作（共訳）	4．発行年 2019年
2．出版社 フィルムアート社	5．総ページ数 352
3．書名 ポストヒューマン――新しい人文学に向けて	

１．著者名 大久保遼、光岡寿郎（編）、増田展大、松谷容作他（分担執筆）	４．発行年 2019年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 380（分担執筆149-176頁、353-375頁）
３．書名 スクリーン・スタディーズ	

１．著者名 レフ・マノヴィッチ（著）、久保田晃弘、きりとりめでる（翻訳・編）、増田展大他（分担執筆）	４．発行年 2018年
２．出版社 ビー・エヌ・エヌ新社	５．総ページ数 376（分担執筆68-85頁）
３．書名 インスタグラムと現代視覚文化論	

１．著者名 谷島貫太、松本健太郎（編）、門林岳史（分担執筆）	４．発行年 2017年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 234（分担執筆19-37頁）
３．書名 記録と記憶のメディア論	

１．著者名 神田孝治・遠藤英樹・松本健太郎（編）、増田展大（分担執筆）	４．発行年 2018年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 256（分担執筆116-127頁）
３．書名 ポケモンＧＯからの問い	

１．著者名 大久保田晃弘・畠中実（編著）、増田展大（分担執筆）	４．発行年 2018年
２．出版社 フィルムアート社	５．総ページ数 208（分担執筆144-153頁）
３．書名 メディア・アート原論――あなたは、いったい何を探し求めているのか？	

１．著者名 原田健一、水島久光（編）、松谷容作（分担執筆）	４．発行年 2018年
２．出版社 学文社	５．総ページ数 328（分担執筆184-201頁）
３．書名 手と足と眼と耳――地域と映像アーカイブをめぐる実践と研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	松谷　容作 (Matsutani Ryosaku) (60628478)	國學院大學・文学部・准教授 (32614)	
研究分担者	増田　展大 (Masuda Nobuhiro) (70726364)	立命館大学・映像学部・講師 (34315)	
研究分担者	唄　邦弘 (Bai Kunihiro) (30792329)	京都精華大学・芸術学部・講師 (34317)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	岡本　源太 (Okamoto Genta) (50647477)	岡山大学・社会文化科学研究科・准教授 (15301)	
研究分担者	篠木　涼 (Shinogi Ryo) (00536831)	立命館大学・文学部・授業担当講師 (34315)	2017年度のみ
研究分担者	大貫　菜穂 (Onuki Naho) (20817944)	京都造形芸術大学・芸術学部・非常勤講師 (34319)	2019年度のみ
研究分担者	福田　安佐子 (Fukuda Asako) (50848835)	国際ファッション専門職大学・大阪ファッションクリエイション・ビジネス学科・助教 (32828)	2019年度のみ
研究協力者	大貫　菜穂 (Onuki Naho)		2017、2018年度
研究協力者	福田　安佐子 (Fukuda Asako)		2017、2018年度
研究協力者	篠木　涼 (Shinogi Ryo)		2018、2019年度